

論文内容の要旨

氏名：若井雅之

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題目：大学生におけるキャリア支援のための役割演技プログラムの開発
—パフォーマンス学の知見を導入したプログラム開発—

近年、大学においてキャリア支援やキャリア教育の重要性が指摘されている。坂井（2007）は、大学におけるキャリア教育の目的として、①職業観と勤労観の育成、②自立性・自律性、③コミュニケーション能力、④人間関係能力、⑤セルフ・マネージメント能力、⑥自己表現力、⑦チャレンジ精神 を挙げている。確かにこれらはキャリアを構築していくために必要な能力である。一方で、幅広い概念であるがゆえに、働きかける支援方法の背景理論にも広さと深さとが求められる。

本論文では、大学生におけるキャリア支援を考える際に「パフォーマンス学」の理論に注目した。日本におけるパフォーマンス学は、1980年以降、佐藤綾子（1947-）によって体系化され、現在も発展し続けている。佐藤（1995）は、「パフォーマンス」を「日常生活における個の善性表現」と定義し、「表現されない実力はないも同じである」と述べている。パフォーマンス学は、「演劇学」、「スピーチ・コミュニケーション学」、「社会学・文化人類学」、「心理学」といった複数の学問領域を研究対象とした学際的な学問である（佐藤,1995）。また、パフォーマンス学では、パフォーマー（表現者）の成長を「自己発見（自分の強みを知る）」、「自己強化（自分の強みを錬成する）」、「自己表現（自分の強みを表現していく）」という3つのステップで捉えている。

これらのことから、パフォーマンス学が「善性表現すること」への支援のみならず、コミュニケーション能力や人間関係能力、チャレンジする能力を向上させるための支援など、大学生のキャリア構築に必要な、幅広く奥深い能力への寄与が可能になる。例えば、1年生と4年生の医学部生を対象に、メディカルパフォーマンストレーニングを実施した佐藤（2013b）や佐藤・藤田・松本ほか（2014）の研究は、それぞれ大学生におけるキャリア支援に対してパフォーマンス学の理論を用いたトレーニングの有効性を示している。

パフォーマンス学の理論を用いて学生支援を行うための方法論としては、「役割演技（role playing）」に注目した。役割演技とは、もともとはモレノ（Moreno, J. L., 1889-1974）の開発した「サイコドラマ（psychodrama）」と呼ばれる、即興劇を用いた集団療法の技法の1つとして考案されたものである。しかし今日では、治療的・診断的効果という文脈を超えて、教育・福祉・産業等の領域で一般的に利用しうる技法として学際的发展を遂げている（堀毛, 2002）。戸田（2012）は、芸術系大学における演劇教育の目標を、「総合的な舞台芸術としての『創作・研究』と、演劇を教育・福祉・医療など幅広く活用していく『応用演劇』を二本柱として位置づけ、常に演劇とは人間探求の学問であるということを教えながら、より専門的な人材育成を指標として挙げてきた」と指摘している。「役割演技」の学問的发展は、まさに戸田の指摘の後者と重ねうる概念であると考えられる。

「パフォーマンス学」と「役割演技」には、「学際的」かつ「演劇学との親和性が高い」という共通点がある。そうして、幅広い知見が必要となるキャリア支援において効果的であることが、先行研究からも示唆されている。パフォーマンス学の知見を活かした役割演技を用いることで、1.表現するものがあることに気づいていない学生に対しては、「自己発見」を支援する 2.表現することに自信のない学生に対しては、「自己強化」を支援する 3.表現する方法が未熟である学生に対しては、「自己表現」を支援する ことが可能になる。特に効果が期待できる対象は、「表現する方法が未熟である学生」、すなわち「自己表現が不十分な学生」である。思い込みが強く自己表現が不十分な学生に対しては、パフォーマンス学の知見を活かして、「どのように振る舞う」ことが「どのような印象形成に寄与するか」について科学的に教えることができる。さらに、役割演技の方法論を導入することで、正しいスマイルやアイコンタクトの仕方といった「非言語的表現」について援助者が一方的に教えるというよりも、自らの表現を自ら振り返ることでより良い印象形成を模索することが可能になると考えられる。

本論文は、第1の目的として、「パフォーマンス学の知見を導入した役割演技」を軸にして、非言語的表現に対する意識を高めて、自ら適切な表現方法を模索することを支援する「大学生におけるキャリア支援プログラム」を開発・実施すること、第2の目的として、そのプログラムの効果を検証することを意図した研究である。

第1章は「本研究全体の背景と目的」である。キャリアという概念は単に「就職活動」や「職業上の経歴」のみを指すものではなく、「人の生き方そのもの」を意味する、より広義な用語であることを明らかにした。本研究においては、「大学生におけるキャリア支援」を主たる目的としている。そこで、本研究では「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」（文部科学省, 2011）という定義を採用して論を進めていくことを明らかにした。

第2章は「キャリアの研究動向」である。国内外のキャリアの研究動向を明らかにしたうえで、特に大学生とキャリアに焦点を絞り、学生相談におけるキャリアの研究動向を概説した。キャリアというものは、国の政策としても注目されている。そこで、文部科学省や厚生労働省からの報告をまとめ、経済界からの報告についても言及した。

第3章は「パフォーマンス学の研究動向」である。日本でパフォーマンス学を牽引している佐藤の研究を紹介し、「パフォーマンス学」とはいかなる学問体系であるのかを明らかにした。本研究では「役割演技」という技法に着目しているので、パフォーマンス学と演劇学の関係性について特に詳細に論じた。キャリア支援に対して、どのようにパフォーマンス学の知見が活用されているのかについて、パフォーマンス学とキャリアという観点から論点を整理した。

第4章は「役割演技の研究動向」である。役割演技を提唱したモレノに直接師事したコルシニ（Corsini, R.J., 1966）の指摘を踏まえて、「役割演技」という技法の意義について詳細に検討した。また、役割演技という技法は演劇的な手法であるため、演劇学との関係性や、役割演技の研究動向についても概観した。

第5章は、「調査研究（予備調査）——大学生キャリア・パフォーマンス尺度の開発と大学生のキャリア・パフォーマンスに関する意識調査——」である。大学生が自らのキャリアを構築していく上で重要になるパフォーマンスに対する意識を、「自己発見」、「自己強化」、「自己表現」というパフォーマンス学の3つのステップ（佐藤, 2014）の視点から開発した「大学生キャリア・パフォーマンス尺度」を用いて調査した。複数の大学の研究協力者から回収した262名分の質問紙のうち回答に不備のあるものを除き、最終的に209名分を本調査における分析の対象とした（有効回答率79.8%）。

第6章は、「大学生におけるキャリア支援のための役割演技プログラムの開発——パフォーマンス学の知見を導入したプログラム開発——」である。先行研究を参考にして、2つの役割演技場面を設定した。場面1は、パフォーマンス学における7つの非言語表現の要素について説明したのち、「就職活動における面接場面」を想定した舞台を設定した。また、場面2は、Challenge・Commitment・Controlというパフォーマンス学の3つのC（佐藤, 2009）について説明したのち、「新入社員として先輩社員に自己紹介をしたが、そっけない対応を受けた場面」を想定した舞台を設定した。この場面は、大学生のキャリア構築において重要であるとされている「チャレンジ精神」（一般社団法人日本経済団体連合会, 2014; 坂井, 2007）を発揮させることを意図した。場面2では単に就職活動という範疇を超えて、時間的にも、求められる能力的にも、より広い意味でのキャリアを考える契機となるような体験ができるプログラム構成となっている。2つの大学で研究協力者を募り、研究を実施した。分析対象者は13名（男性11名 女性2名）であった。

第7章は、「大学生におけるキャリア支援のための役割演技プログラムの検証」である。大学生キャリア・パフォーマンス自己発見尺度 ($d(12)=5.70, p<.001$)、大学生キャリア・パフォーマンス自己表現尺度 ($d(12)=3.80, p<.01$)、自尊感情尺度 ($d(12)=3.26, p<.01$) では、実施前より実施後の方が有意に高い得点を示した。検証の結果、研究協力者はプログラムに参加することを通じて自身のキャリア構築に関する意識が向上したことが明らかとなった。「パフォーマンス学の知見を導入した役割演技」を体験することによ

って、キャリア構築に関する意識が向上されたということは、キャリア構築を模索している大学生にとって、学生支援という観点からも有効であることが指摘できる。

第8章は、「総合的考察」である。本研究全体の総合的な考察を行い、上述の第1の目的、第2の目的ともに達成されたことについて述べた。キャリア教育の必要性が指摘されている昨今、自分自身を表現する力を育成することは必要不可欠な課題であるといえる。キャリア構築に関する意識の向上が確認できた本プログラムは、大学生におけるキャリア支援に寄与しうるプログラムであることが明らかになった。